

# 美の瞬間と言語の成立

## 要 旨

美の瞬間という問題は、一般的には、美が時間によってどう規定されどう成立するかということであり、美的現象と非美的現象が時間の様相においてどう説明されるかという課題である。これは瞬間という概念の超越的意味を時間的次元において捕捉し、さらにそれが美の自立性という見地からどう扱われるかという二つの課題として路線づけられよう。

Günter Wollfart (1943-) は、最近の三著でこの問題を追求し、この基礎概念を近代哲学の源流に遡って、体系的歴史的に通視している。そしてここではとくに、美の瞬間と言語の成立ということが一つの重要な中心的課題をなしている。それはハイデガールの『存在と時間』の第六八節(d)にみられる、語りの分節(化)という問題を今日の言語哲学—記号論の文脈における言述と同一の意味で扱っており、これが全体を通じての一つの重要な路線を示しているために、この三書に従いつつその展開を追うことにしたい。

キーワードズ：瞬間、言語、ハイデガー

渡 辺 鴻

美意識と美の理念と芸術の根源を時間によって規定しようということ、さらにその時間の極限をなす瞬間に対する考察はすでに早くから存在した。シェリングは芸術作品は一つの理念であると考え、理想的なものすなはち非時間的なものの時間的なものへの実現という弁証法的過程においてみられることであり、またこの非時間性が時間の中にみられることであるとし、『芸術は瞬間においてその本質を現わすものであるがゆえに時間から離脱し、その本質を純粹な存在としてその生命の永遠性において示すものである』とし、この極点性、空間と時間の極限の状況こそ芸術哲学の根本命題であり、『芸術こそ唯一の真にして永遠なる哲学のオルガノンでありドキュメントである』とした<sup>(1)</sup>。キルケゴールはまた、宗教的著作者として悲調と感傷をこめてその信仰の契機を『瞬間』と呼んだ。そしてこの概念はハイデガーの『存在と時間』において哲学の中心的課題となり、それに対応する O. Becker の『美の崩落性と芸術家の冒険性』において美学上の最重要課題となったのである。O. Pöggeler はいままたこの問題に触れて、偉大なる芸術作品は『尖端的性格』をもつものであり、それは尖端のように『屹立』し、周囲からの『完全な孤立性の極限に到り、完全な到達不可能性に達する』とし、また芸術家という現存在の努力と決意性は実存の投企に由来するもので、その実存はその歴史的可能性を把握し、自ら『瞬間』において自己自身に到るとし、さらに芸術家はその醒めた純正な眼によって現在と瞬間を把握し、一方その夢みる目によって宇宙と共感し自然全体の上に漂い、自らはそのつねに現存的である形象から離脱している<sup>(2)</sup>、としている。

\* \* \*

美の瞬間という問題は、一般的には、美が時間によってどう規定されどう成立するかということであり、美的現象と非美的現象が時間の様相においてどう説明されるかという課題である。またその現象の断絶性と非同一次性という点では、とくに突然性という項目で記されよう<sup>(3)</sup>。これは瞬間という概念の超越的意味を時間的次元において捕捉し、さらにそれが美の自立性という見地からどう扱われるかという二つの課題として路線づけられよう。

Günter Wohlfart (1943— ) は、最近の三著でこの問題を追求し、この基礎概念を近代哲学の源流に遡って、体系的歴史的に通視している。そしてここではとくに、美の瞬間と言語の成立ということが一つの重要な中心的課題をなしている。それはハイデガーの『存在と時間』の第六八節(d)にみられる、語り Rede の分節(化) Artikulation という問題を今日の言語哲学—記号論の文脈における言述 discours と同一の意味で扱っており、これが全体を通じての一つの重要な路線を示しているために、この三書に従いつつその展開を追うことにしたい。

Augenblick, Zeit und ästhetische Erfahrung bei Kant, Hegel, Nietzsche und Heidegger mit einem Exkurs zu Proust 1982

Denken der Sprache, Sprache und Kunst bei Vico, Hamann, Humboldt, und Hegel 1984

Punkt, Ästhetische Meditationen 1986

まず最初の『瞬間』であるが、この書においては副題のとおり、カント、ヘーゲル、ニイチェ、ハイデガーに一章づつを設け、これらの思想家に対して内部から批判し、時間概念についての考えをまとめようとしている。そしてこの時間概念を出発点として、時間と美の体験との予期せざる関係をみようというものである。しかしながら、この書の中心的課題はとくにその最後のハイデガーについての章にあるのであって、とくにこの章において美の瞬間と言語の問題が浮上し、これが次の二書の思考の展開につながっていく。それは本来的時間性の脱自態的統一性における言語性についての、すなはち瞬間の言語的分節化についての課題である。これは、この問題についての体系的歴史的序論につづいて、『存在と時間』の第六八節の批判から出発して、彼の後期の著作に基づいて瞬間と聴取の関係とさらにまた瞬間と沈黙の関係を問うものである。ここではまず瞬間の超越の意味が本来的・非本来的な時間とどう関連しているかが問われる<sup>(4)</sup>。

この先駆的・反復的瞬間は、宿命的なすなはち本来的歴史的な瞬間であり、ここにおいて『個人個人の最大の時間が唯一の瞬間に集約される』のである<sup>(5)</sup>。

この本来的な現在とは、瞬間として、「本来的でない現在として措定される現成(化) *Gegewärtigen* を本来的なものにするという意味で」、今日を『非現成化』することによって、今日を本来的に開示する<sup>(6)</sup>。先駆的・反復的瞬間は、この非現成化を実現するものとして、予期し把持する現成化に対する返答であるが、この予期し把持する現成化の、語りとし

ての分節化が今をいう発言であり<sup>(7)</sup>、今日という類落的公共性からの、発言された時間からの、すなはち現在からの、自己離脱である<sup>(8)</sup>。では、この現成化に対する瞬間の返答は、さらにどのように理解すべきなのか。

この現成化という概念は世界への類落ということの特徴づけられるのであるが、これが今をいう発言の中で語りとして分節化するものとして、言表 *Aussage* と根源的な関係に立つとすれば<sup>(10)</sup>、この瞬間の言語性というこの本来的歴史性の時間性としての課題が成立する。

では、この瞬間の語りとしての分節化とはなにか。この瞬間という概念は『存在と時間』においては、本来的な語りとは、すなはち本来的な分節化と結びつくものとされるのだろうか<sup>(11)</sup>。

彼はここで、この章の同時にまたこの書の中心的課題として、ハイデガーにおける語りの時間性に言及し、語りの本来性と非本来性について以下のように考察する<sup>(12)</sup>。

ハイデガーが語りの時間性について『存在と時間』の中では解こうとしていないのは、あくまで外的な以下の理由によるものだろう—すなはち『語りの時間的構成の分析と言語的形象の時間的性格の説明は、存在と真理の根源的な関係が時間性の問題から解かれたときにはじめて着手されるべき問題である』からであり<sup>(13)</sup>、これは『存在と時間』の中では扱われていない。ハイデガーは第六八節(d)の語りの時間性の位置づけの冒頭で、第三四節を参照するように示しているが、ここでは語りは情状性 *Befindlichkeit* と了解 *Verstehen* とともに、実存的に同等の根源を

もつものとされているのである。ハイデガーは、語りということでも分節化を、すなわち情状的了解性が意味的に分別化することと考えているのである。<sup>(14)</sup>

この情状性とその被投性 Geworfenheit (事実性 Faktizität) という形で、すなわち、その本来の意味は既存性 Gewesenheit において認められるという形で現存在を開示するのに対して、<sup>(15)</sup> 了解はあくまで(実存の) 投企 Entwurf の性格をもつものであり、<sup>(16)</sup> その本来の意味はあくまで未来 Zukunft にあるのである。

この、情状性—既存、了解—未来、という対概念が、その様相上、本来的・非本来的という点では無差別な項目だとするならば、それに応じて語りは現在 Gegenwart に帰属する無差別な項目だということになる。しかしそれは不可能である。

この語りはおおむね言語の中で発言されるのであり—ハイデガーは『存在と時間』の中で、言語は語りのたんなる言表性であるとして<sup>(17)</sup>いる—、とくに外的世界 Umwelt を考慮した形での語りかけである以上、それが現在のであるためには、特別な構成機能が求められているのである。<sup>(18)</sup>

この語りは、それゆえに—まず第一に—そしておおむね—現存在を類落の形で開示するのであり、この類落の第一の意味は非本来的な現在であり、予期しつつ把持する現成化であり、<sup>(19)</sup> この現成化という概念は、すでにみたように言表と根源的につながっているのである。この語りを非本来的な現在に位置づけるということは、とりもなおさずこの語りを非本

来的に了解していることを示す。しかしながら語りそのものは、元来、<sup>(20)</sup> けして非本来的な語りとして終わるはずはなく—それはたとえば『詩作的』な語りをみれば判るとおりであるが—、いずれにせよこの語りは、自分のみるところでは、『存在と時間』の中では非本来的というただ一つの地位だけしか与えられていないということになる。

『存在と時間』の第六八節で示されている語りの時間性の分析では、この本来的な語りについての考察は行われておらず、それゆえに改めて、次のことが問題になる。それは、もし非本来的な語りが非本来的な現在(現成化)と関連しているとすれば、本来的な語りは本来的な現在(瞬間)と関連するはずであり、この関連性は具体的にはどう考えるべきか、ということである。

第一の疑問は、なぜこの語りの時間性の分析においては語りが非本来的な形でのみ考察され、またそれとともに現在がその非本来性のゆえに遊戯化するかということである。これについて Pöggeler は、『存在と時間』においては瞬間が空虚なままに止どまっているかぎりけして本来的な語りをすなわち本来的な分節化をもたらすことはないからだ、<sup>(21)</sup> としている。すなわちこの瞬間を空虚なままに止どめている秘匿的動機が分析に矛盾をもたらすのだ、としている。

ハイデガーが『存在と時間』の中で、語りの時間性の分析で矛盾を示しているということは否定しがたく、われわれは、それゆえに、彼のそれ以後の著作によってこの本来的な語りの時間性について、すなわち本来的な現在の語りの分節化について追求し、そこから逆に『存在と時

間』にもどって、この課題に対する回答の緒口があったかどうかを確かめなければならぬ。

この語りの問題が『存在と時間』の後半に圧迫されていること、そしてこの語りの時間性の分析は極めてあっさりしていて、それはむしろ非本来性の一つの様相の形で示されていること、また現在はその非本来性のゆえに遊戯として扱われていることは、否定できない。ハイデガーは、しかし一方、第六十章において、すなわち『存在と時間』の後半の第二章の末尾で、現存在の開示性の構成要因として、不安の情状性と自己独自の負目に対する自己投企としての了解と沈黙 (sic) としての語りについて言及している。<sup>(22)</sup>

しかしながら少なくともテキストの比較解釈という点からみると、ハイデガーのいう、語りの様相上無差別な構成契機と非本来的な語りにおいて分節化している頽落の契機との間に動揺があることは否定しがたく、彼は開示性の構成要因として情状性と了解とともに頽落と語りを同じレベルで認定していたことになろうか。<sup>(23)</sup>

そしてこの四分法は、体系的破綻を一時的に彌縫するというよりはむしろ、ハイデガーが第六八節(d)の冒頭で述べているように、この語りはとくに一定の脱自態 *Entsehung* において時熟するのではなく、情状性と了解と頽落によって構成される現存在の完全な開示性の分節化であり、現存在一般の頽落<sup>(24)</sup>しつつ気分づけられる了解の分節化として、この三つの構成契機に依拠する三つの時間性による脱自態をすべて含むことを意味するもののだろうか。さらにまた情状性が既存性 *Gewesenheit* に依

拠し了解が未来性に依拠しているように、語りはある一定の脱自態としての現在に依拠しているのではなく、時間性の脱自態的統一性に依拠しているということになれば、<sup>(26)</sup>この語りは『存在と時間』の中で圧迫されているどころか、むしろ『特別の地位』を得ていることを示すものではないだろうか。<sup>(27)</sup>

このように語りが『存在と時間』において言語の『特別の地位』と関連するならば、自分の疑惑は解消し、この語りの問題が圧迫されているということに対する *Pöggeler* の批判も了解されよう。

この『存在と時間』の第六八節においては、言語の地位ということについて、ある確かな『傾向の転換』が示されはじめているが―それは言語についての重心の移動であるが、いろいろな事情から語りの時間的構成の分析は第六八節(d)では延期されているということであり―、それゆえにハイデガーがこの節で、現成化ということに対して特別の構成的機能を約束していることについては、依然論争は収まらないだろう。

同様に三分法による、了解―情状性―語り、実存―事実性―頽落、未来―既存性―現成化、を相互に整理し、その上で、語りはある一定の脱自態にすなわち現在に依拠させるべきなのか、そしてその語りは現存在を頽落の中で、すなわち非本来的な現在である現成化の中で開示するものとすべきなのか、あるいは語りはこの三分法を包括するものと考え、またこの語りは頽落しつつ気分づけられる了解の分節化として、非本来的な時間性の脱自態的統一体としての現成化しつつ既存している未来、すなわち未来的に既存している現成化に依拠させるべきなのだろうか。

すなはち現在と語りはその非本来性のゆえに遊戯となってしまうのだろうか。本来の語りとの時間性についての課題は、すなはち本来の現在の言語性についての課題は、この前にも後にも答えられていない。それでは瞬間は—たい本来の語りに対応するのだろうか。もしそうなら、この両者の関係は具体的にはどう考えるべきか。

このように、語りの分節化の本来の様相の時間的説明は根本的な疑問を残したまましかもある種の解決を予想させながら後期の著作での思考が展開する。<sup>(28)</sup>

言語は人間の現存在の最高の事象であるかぎり、『静寂の事象』<sup>(29)</sup>であり『音声として発せられる静寂』<sup>(30)</sup>であり『静寂の呼びかけ』<sup>(31)</sup>である。

本来の語り（本来の発言）は、瞬間に対して、非秘匿性（真理）の事象として対応するのであり、これは沈黙 *Schweigen* である。

この瞬間に本来の対応する沈黙は「語られた沈黙」であり「語られる語らざること」である。<sup>(32)</sup>

すなわち『思考の発言は沈黙である。この発言は言語のもっとも深奥の本質に対応し、この言語はその本質を沈黙の中に保持しているのである。』<sup>(33)</sup>

ハイデガーはこの沈黙を『非言語としての対応 *Ent-sprechen*』<sup>(34)</sup>として、すなはちもっとも本来の聴取 *Hören*<sup>(35)</sup>として捉える。われわれは瞬間の要求に対して、沈黙しながら『非言語の形で対応』し、すなはち『静寂の呼びかけ』を聴くことによって『反語として回答 *ant-worten*』するのである。<sup>(36)</sup>

ハイデガーは、この「対応」と名付けたものに思考者の本質を認めるとともに、詩作の本質をも認めているのである。<sup>(37)</sup>

言語が本来の意味での詩文として捉えられるならば、<sup>(38)</sup>思考の言語の本質は詩文の言語の本質から理解されなければならない。<sup>(39)</sup>まさしくこの非言語の形で対応する者たちが詩人である。この詩文の言語は『神的な美 *Göttlich Schön*』<sup>(40)</sup>に対応するのである。

これは瞬間の言語的解釈であり、瞬間の脱自態としての経験の一つのあり方を示すものであり、この脱自態においては概念なきものがそのまま非秘匿性の事象に対応するわけで、このような瞬間の経験は瞬間を美の現存性という形で経験することであろう。<sup>(41)</sup>

この解釈は瞬間に対応する本来の語りを具体的に示すものであり、純粋な、言語の下部にあるもの *Untersprachlichkeit* に対して言葉が語られるのである。すなはち本来の語りは瞬間に対応するものであり、静寂沈黙の神的言語（美の言語）である。神々の言語は劫初以来目くばせである。瞬間に対する言葉の根本は目くばせである。<sup>(42)</sup>

これまで追究してきたように、瞬間を「静寂の呼びかけ」の本来の現在として解釈することについて、瞬間の言語性の「美的」「倫理的」解釈の可能性は、もしこの二つの解釈がじつは一にして同一の言語的解釈の異なった側面であると把握されるならば、この語りはもはや美と倫理の「あれか／これか」ではありえないことを示しているのである。

このように瞬間における言語の超越の意味は美と倫理の関係を無差別化するというよりもむしろ意識的に密着させた形で、すなはち美の自律

性を止揚した形で言語の芸術性の問題に引継がれる。すなはち第二の『言語の思考』は副題の通り、ヴィコ、ハマン、フンボルト、ヘーゲルの四者について言語と芸術の関係を問うのであるが、ここでいう言語とは前書で考察した「瞬間において分節化する言語」の概念が基本になっているのであり、これを言語哲学の先駆者達に遡って再確認しようというものである。すなはちこの書の第一主題は「分析的言語哲学とは異なる弁証法的言語哲学」であり、第二主題は「言語と芸術の関係」であるとし、とくに後者について以下のように述べている。<sup>(43)</sup>

われわれは普通の言語習慣においては「表面」で動いているだけであって、その根拠へ到ることがない。しかしながらその間に普通言語の中に露呈されずに *unterbelichtet* いるものが露呈される *belichtet* ことがある。このとき言語の中にある程度現れている根拠へ、すなはち文節を発言する際に跳びこえられている深奥 *Tiefe* へと目ざしが投ぜられる。<sup>(44)</sup> この目ざしは瞬間的な目ばたきであり、これによって普通は言語の中に隠蔽されている歴史が閃光的に照明されるのである。

この瞬間はいわば後方への目ざしであり、意識の回帰であり、この回帰によって普通は通過されているものが、すなはち「言表文節から意味をたどろうとするために」文節の対象から文節の言表へと通過する際にしばしば生起するものが意識される。この目ざしの転換によって、言語の中に記憶された歴史が突然現れるのである。

普通の言語習慣においては、あるものが突然特定の意味を受取るということがあり、また言語の行間にあるものが、すなわちそれが何である

かが正確にいえないものが透視されるのである。そこに現存するものが（たとえば人間）、まさに生起しているものが、外的なものが（たとえば音楽の一定のテーマ）、あるいは外的にされたものが（たとえば名前）、ある既存のものにおいてあるいはこれに何らかの形で対応して生起するものにおいて、ある種の必然生をもって回想されるのである。生起したものと生起しつつあるものは、いままた現存しているものと既存したものとして、一瞬のうちに合致するのである。<sup>(45)</sup>

この瞬間は「もっとも光輝あるもの」が突然認められる瞬間であり、美への瞬間であり、美的顕現の瞬間である。

この美的体験の瞬間は言語においてつねに反復される根源への必然的な回想である。この感覚的なものと非感覚的なものとの拮抗運動は言語では説明できない直感の衝突であり、概念なきものと抽象的一般概念との衝突である。

この言語なきものが意識へ転換される瞬間は、沈黙の形象的言語の『意味的一般概念』<sup>(46)</sup>への語りかけの瞬間である。この瞬間において意識はその背後にうごいているものを体験するのであり、概念なきものから概念が形成されることである。

美的顕現とは言語の本質の突然の前兆的出現である。この言語の本質は深奥に隠されて止どまっているものではなく、それは出現しなければならぬのである。それは美として出現するのである。美は言語の本質である意味創造の感覚的現れと規定される。<sup>(47)</sup> この美の体験の瞬間は言語が意味を負担する過程についての洞察である。

美は言語の内的形式の突然の光輝であり、言語の詩作的・意味形成的性格の前兆的出現である。<sup>(48)</sup> 美的体験はこのかぎりにおいて言語の意味形成的過程の体験ということになる。

もし言語の内的性格は意味形成であり意味公開であり世界公開であるならば、いかえればすべての言語がすべての文節がすべての単語が独自の世界観を持つものだと<sup>(49)</sup>して、さらにこの世界観は普通の言語習慣や普通の世俗環境においては視ることができないものであるとするならば、美的体験は一つの瞬間に対して言語のもつ意味公開と世界公開の性格への洞察を保証するものであり、われわれはこの美的体験においては普通の言語習慣におけるおりの非言語的非概念的「世界観」の瞬間において自ら洞察的になるのである。芸術家はこの瞬間を表現する。個性的芸術家は、すべて、ある世界観を代表するのである。

芸術作品はある世界をわれわれの前に表現する。<sup>(50)</sup> この作品は眼と意味を開かせる。個性的芸術家は、すなわちその創作において自己の言語を発言する芸術家は、その営みの中で、自覚の有無にかかわらず、言語自身の営みを模倣するのである。芸術は、その処理過程の深奥の説明しがたい部分において、言語を回想するのである。

芸術創作はすべて、狭い詩的意味ではなしに、言語の意味形成的詩作的根拠のムネモシュネー「記憶総合」である。<sup>(51)</sup> 芸術は意味を形象的に出逢わせる。意味はこの場合固定された結果ではなく無意味性の止揚されたものである。意味はそれ自体が反意的である。芸術作品の意味形象はこのように理解される。芸術作品は新しい意味の相互関係を開示する。

それは自由への自己提示である。

第三の書『極点』においては、美の瞬間における言語の分節化の問題は、言語的視覚的聴覚的次元において広範な展開を示す。ここでは「言語と超越的美学」という題名の下に「言語文節と音節における時間的順序の止揚」と「言語テキストと図形テキストの了解的読受における空間的順序の止揚」が示される。<sup>(52)</sup>

△言語―発言された文節▽ 了解の糸は、もしそれが失われずにいる場合は同時に自己の中に跳返り、それによって時間はその連続の様相を暫定的に止揚する。文節の相互関係の意味の了解はこのように線としてではなく―この線は時間の連続の様相の姿とされる―、同時に「節線」として示される。<sup>(53)</sup> この意味の相互関係の了解過程はそれゆえに非連続的であり、その時の条件に応じて時間の流れの形を超えて静止するものとして、あるいは後退するようにみえながら再度急速に経過してゆく。この時間的順序の中継的止揚は多少ともに意味を含んだ共存であり並存であり、そこでわれわれは考想し想起するのであり、これは判断における総合化であり順序の分節化であるが、この総合化や分節化はある発言された文節の聴取あるいは意味了解の際には―それ自身は聴取できないために―、普通は意識されることがない。文節の了解的聴取においては時間的順序は止揚される。

△音楽―音▽ 音節の了解的聴取、あるいはより限定して音楽の「テーマ」やモチーフの了解は、音の順序的系列を聴取するという形では行なわれない。音楽の聴取は、連続的把握であるばかりではなく、音の連



統の同時的な美的理解であり、音の連続的把握における多様性の統一であり総合であり、これは先駆的反复的瞬間の自己内部における分別的統一において実現する。この音の連続は、音の形象として現れ、自己内部に時間を内蔵する<sup>(54)</sup>。このように聴取の頂点としての瞬間においては、瞬間の時間的スパンに対する音のたんなる聴取は中止され、われわれは聴き聴入り、一気に急速に捕捉し、感覚を奪う形で音楽における音の聴えない部分を聴くことができるようになるのである。音節の了解的聴取においては時間的順序は止揚される。

△文書―記された文節▽ 記された単語は意味のある記号であり、感覚的―非感覚的であり、視覚的―非視覚的である。それは眼が見るのではなく、われわれが視るのである<sup>(55)</sup>。その意味はまず断片として単語の間隔において、すなわち単語の間白において現れる。その意味の関連性の了解にはこの一つのテキストの組織を貫通している「沈黙の糸」が必要である<sup>(56)</sup>。ある一つの文節をあるいはある一つのテキストを読むということは文字の順序の連続的把握だけではなく、同時にこの文字の連続を理解しているのである。記された文節のすなわち言語テキストの了解的読受においては空間的順序は止揚される。

△造形芸術―図形▽ ある図形の了解的観取ということは、点、線、色、の順序を見ることで成立つのではない。二つの眼の目ざしが一瞬間うちに総合されたときに、この図形は美的意味のある極点を通じてわれわれに目くばせし、図形的にわれわれに語りかけ図形的総合結果を示すのである。これは一気の「一瞬の」感覚的認知ではあるが、けして「一

目で」成立するのではなく数回の観察の後に捕捉されるのである。この突然の捕捉は、すなはちある図形の美的跳躍点に接触するということは、長い忍耐づよい図形瞑想の結果であり、眼はその図形を感覚的知性によって感覚的に意図しつつ辿り廻るのである。図形テキストの了解的読解においては空間的順序は止揚される。

音楽の聴取において、すなはち音の対話の了解において、語られた文節の了解の際に聴き過されていた時間の止揚が突然聴取可能になり、また図形の観取において、すなはち形と色の対話の了解において、記された文節の了解の際に見過されていた空間の止揚が一気に観取可能になるとすれば、「芸術の文法」は言語の「深層文法」とみられることになる。この芸術の織地においては自然な芸術作品の技術は言語を出現させるのである。いいかえれば芸術においては言語の芸術が出現するのである。芸術は暗黒の根源に下ってそこからあるものを言語化し、この言語は人をして世界の現存を了解せしめ、人をして世界に到らしめるのである。芸術は世界を現存化する。芸術は言語の源泉から発し自然の中に発しているのである。芸術においては言語の源泉が回想される。芸術は理性のアナログーであり言語のアナログーである。

このようにここでは美の瞬間における言語の成立ということの本来の課題すなはち『存在と時間』にみられた矛盾を超えてその現象学的分析とその時間的解釈をさらに押進めるといふ正面からの追求はなされていない。しかしながらハイデガー自身が『存在と時間』で問題提起の形で考察を打止め、それ以後はこの問題について哲学的理論的言語による思

考から詩作的象徴的言語による思考に転じたということは重大な意味があるのであって、他者によってはこれ以上の追求は及びがたいということが背後にあるのかもしれない。さらにこの時間概念の基本は本質的に終末論的なものであったことを考えれば、近代や現代の美的芸術的現象の中にはその痕跡が感受されるという程度で、この種の概念を文芸学上の基礎概念として手段化するには慎重な用意が必要だろう。このようにみれば、この著者が三書においてそれぞれの基礎概念を主要哲学者それぞれについて体系的歴史的にさらには共時的通時的に並列比較しその基礎概念の根源に遡って考察を進めているのは、このような視界展望において暗黙の裡に課題の解決を提示し了解させようという用意かもしれない。これは普通の論理的考察とは異なるが、このように広く長いスパンの視界展望において課題の分布配列をみようということは理論の歴史解釈の試みとして、すなわち美の基礎概念の歴史哲学的処理といえるものだろう。

〈注〉

- (1) Schelling F. W. J. Über das Verhältnis der bildenden Künste zu der Natur, System des transzendentalen Idealismus の②
- (2) Pöggeler O. Hermeneutische und mantische Phänomenologie, Heidegger, Perspektiven zur Deutung seines Werkes 1969, 335 ff.
- (3) Bohrer K. H. Plötzlichkeit zum Augenblick des ästhetischen Scheins 1981, 7.
- (4) ①の②の③ Augenblick 134 ff.
- (5) Heidegger M. Nietzsche I 37.
- (6) Sein und Zeit 391, 397.

- (7) SZ 416.
- (8) SZ 411 ff.
- (9) SZ 397.
- (10) GA 21 § 37.
- (11) Pöggeler O. Der Denkweg M. Heideggers 210.
- (12) ①の②の③ Augenblick 136 ff.
- (13) SZ § 68, 349.
- (14) SZ 151 f, 133.
- (15) SZ 136.
- (16) SZ 145.
- (17) SZ 161, 167.
- (18) SZ 349.
- (19) Pöggeler O. Der Denkweg M. Heideggers 210.
- (20) SZ 162.
- (21) Pöggeler O. Der Denkweg M. Heideggers 210.
- (22) SZ 296, 221.
- (23) SZ 269, 335.
- (24) SZ 349.
- (25) SZ 335.
- (26) SZ 349, 350.
- (27) Bock I, Heideggers Sprachdenken 21.
- (28) ①の②の③ Augenblick 152 ff.
- (29) Heidegger M. Unterweg zur Sprache 214.
- (30) ibid 30 ff, 215 f.
- (31) ibid 32, 141 f.
- (32) Identität und Differenz 72 の②
- (33) Nietzsche I 471.
- (34) Unterweg zur Sprache 76, 262.
- (35) ibid 32 f.
- (36) Was ist das die Philosophie? 32.

- (37) Erläuterung zu Hölderlins Dichtung 54.
- (38) Holzweg 61.
- (39) Erläuterung zu Hölderlins Dichtung 40.
- (40) *ibid* 54.
- (41) Der Ursprung des Kunstwerks 18 ㄹㄹㄹ
- (42) Unterweg zur Sprache 114.
- (43) ㄹㄹㄹㄹ ㄹㄹㄹㄹ Denken der Sprache 41 ff.
- (44) Wittgenstein Philosophische Untersuchungen § 92, 111, § 89, 129, 415.
- (45) Wohlfart G. Augenblick, der Exkurs zu Prousts.
- (46) Vico *Scienza Nova*, *De nostri temporis studiorum ratione* ㄹㄹㄹ
- (47) Liebrucks B. *Sprache und Bewusstsein* Bd. 2, 503.
- (48) *ibid* Bd. 2 Kap. XV, *Sprache und Kunst* 493.
- (49) Humboldt *Werke* III 224, 434.
- (50) Humboldt *Werke* II 148 f.  
Heidegger M. *Der Ursprung des Kunstwerks*, *Holzwege* 1963. 29 ff
- (51) Hegel *SW* 3, 210.
- (52) ㄹㄹㄹㄹㄹㄹ Punkt, 92 ff.
- (53) Hegel *Wissenschaft der Logik* I 381 f, Anm.
- (54) Schelling *Philosophie der Kunst* § 79.
- (55) Wittgenstein *Bemerkungen über die Philosophie der Psychologie*  
a. a. O., § 1100.
- (56) Merleau-Ponty M. *Le Langage indirect et les Vois du Silence*.  
*Das Auge und der Geist* 69 ff.

〔一九七八年十一月六日受理〕